2020/5/7　中村

第8章 帰依して律儀を受ける

目次より

第 1 章　因の善逝蔵　　※野田先生による解説（翻訳者ノート）
第 2 章　依処の人身の宝　　↓ここから第 1 回？の勉強会（翻訳者ノート）
第 3 章　縁の善知識
第 4 章　有為は無常であること
第 5 章　輪廻の苦
第 6 章　業果
第 7 章　慈と悲　　↑ここまで（井原さん担当 20180222）（翻訳者ノート）

第 8 章　帰依して律儀を受ける
第 9 章　菩提心を摂受する　　今回の箇所
第 10 章　誓願の発心

第 11 章　六波羅蜜の設定
第 12 章　施しの波羅蜜
第 13 章　戒の波羅蜜
第 14 章　忍の波羅蜜　　【六波羅蜜】の勉強会
第 15 章　精進の波羅蜜
第 16 章　静慮の波羅蜜
第 17 章　智慧の完成（般若波羅蜜）　　↑岩村さん担当 20200423（六波羅蜜）

第 18 章　道の設定
第 19 章　地の設定
第 20 章　果――正等覚者（完全な仏陀）
第 21 章　仏陀の事業（じごう）

ガルチェン・リンポチェ法話集1　修行の道　『五重の道のマハームドラー』p137

前行講座　ドルズィン・トンドゥプ・リンポチェ

帰依の目的は、苦から解脱することです。

五重の道のマハームドラー　帰依

P20 ～

共通でない（不共の）前行には四つの項目があるが、その第一は、三宝の保護のもとに入ることであり、すなわち帰依である。帰依は仏法に入るための入口である。三宝に対し完全な信頼をもって、疑うことなく帰依することの福徳は、計り知れないものである。『般若摂頌』にいわく、「帰依の福徳形があるならば｜三界さえも入れるに小さすぎ」と。『法華経』にいわく、「僧であれ俗であれ、この賢劫にわが教えに入る者は誰であれ、残りなく涅槃に入るであろう」と。これらも帰依と発心を思われてのことである。

「虚空のごとき一切有情を輪廻の苦海から済度するため、三宝に帰依しよう」と心に念じて発心して、 まず帰依の対象を明確にイメージせよ。

2020/5/7　中村

前なる海中如意の宝樹あり　中央宝座の蓮華と月の上
すべてのブッダの上師持金剛　カギュの成就者海と取り囲み
右には三世諸仏が荘厳し　賢劫千仏ともに座られて
後ろは般若波羅蜜大仏母　顕密法話がおのずと説かれおり
左は守護の三族菩薩たち　尊き三乗サンガに囲まれて
周りをかこむ守護神たちの海　雲のごとくに集まり輝けり

このように帰依の対象を眼前に明確にイメージし、汝と無量の一切有情とが、帰依の対象に対して、今より菩提を得るまでの間、身・語・意で恭敬し帰依し頂礼すると思惟せよ。

南無真実上師の諸仏の法身と　自性報身本尊正法と
悲心の応身空行僧衆らに　菩提を得るまで帰依したてまつる

※ちなみに上記 4 句で五体投地を行いますが、私、本日現在 93 〇 00 回となりました。

解脱の宝飾（5/7　P148L1 ～ P150L6）

（V96）
いまや仏陀を成就する方便を知らないことの対治として、最上の正覚（菩提）に発心する諸法を説明しましょう。

帰依（きえ）仏教語大辞典
仏・法・僧の三宝を敬うこと。

律儀（りつぎ）仏教語大辞典
《梵 samvara 三波羅の訳。禁戒とも訳する》　悪行または過失に陥ることを未然にふせぐはたらきのあるもの。善行のこと。

方便（ほうべん）仏教語大辞典
①真実の教えに導くためのてだてとして仮に用いる手段としての教え。世の人を救い、悟りに導くために一時、手段として用いる方法。

菩提　（ぼだい）野田先生の用語集
悟り

発菩提心
摂（ウ）義は、「依処と〔自〕体、区別と所縁、因と受ける対境と、儀軌、利徳、過患と、失う因、回復する方便、学処――これら十二により、最上の発菩提心は包摂提されている。」　というのです。

※『最上の発菩提心は（12 に）包摂提されている』と書かれているけれど、これに対応している英語の箇所はなかった。本文もこの 12 が次から説明されているかと思って読んだが対応していない。（後半の摂義の『九つの義』はきちんと対応している）
→原版にはこの文節、ないんじゃないかな？どうでしょう。

菩提心（ぼだいしん）仏教用語の基礎知識 P26
菩提心とは道心ともいい、菩提すなわち悟りを求める心である。菩提心を起こした者は菩薩といわれ、菩薩は同時に四弘誓願などの願いをもつ。四弘誓願とは、すべての菩薩に共通して存在する四つの誓願であって、それは衆生無辺誓願度（衆生は無数無辺にあるから誓ってかれらを救済度説することを願う）、煩悩無尽誓願断（理想をさまたげる煩悩は無限無尽にあるから、誓ってこれを断滅することを願う）、法門無量誓願学（仏教の教えとしての法門は無量無数であるから、誓ってこれを学ぶことを願う）、仏道無上誓願成（仏の悟りは無上最上のものであるから、誓って悟りを開いて仏となることを願う）であって、他を救済し自らを完成するための四つの願いである。

発菩提心の依処の人

そのうち、第一、最上の正覚に発心する依処の 人（プドガラ） は、

1)大乗の種姓をもった者と、
2)三宝(H44a) に帰依している者と、
3)別解脱戒の七種類のどれか一つを具えている者［ですし］、

そして誓願の発［菩提］心をした者たちは、発趣の発心の依処ですが、三宝に帰依していること以下を具えている者は、誓願の発心の依処の 人（プドガラ） です。

1. Foundation. First, the foundation for cultivation of the mind of supreme enlightenment is a person who:

A. belongs to the Mahayana family,
B. has taken refuge in the Three Jewels,
C. maintains any one of the seven pratimoksa vows, and
D. has aspiration bodhicitta.

※日本語は 3 項目、英語版は 4 項目。まあ良いけど…。

『人（プドガラ）』って、何？
補特伽藍（ふとがら）仏教語大辞典
《梵 pudgala の音写。人・数取趣（さくしゅしゅ）と訳する》　生死を繰り返す主体のこと。また、人我と同義に用いる。

別解脱戒（べつげだつかい）仏教語大辞典
《梵 pratimoksa の訳。波羅提木叉と音写》　律儀戒のこと。それぞれ個々の戒（不殺生戒、不偸盗戒など）を守ることによって、それぞれの悪から解放されるところからいう。在家信者の五戒、比丘・比丘尼の具足戒など。

十善戒：
不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不両舌、不悪口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見

在家の五戒：
不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不酒飲

※『別解脱戒の七種類のどれか一つを具えている者』は後日学習（P155）

宝間比丘の話（HP：『ネパールの子供達』より）

お釈迦様の弟子で宝間比丘（ほうげんびく）と言う方が、「私は今から修行に入ります

ので、一番大切な注意事をお聞かせください。」とお釈迦様に尋ねました。するとお釈迦様は、「そなたは盗む事なかれ。それだけを考えていれば後は何も気にしなくても良い。」と言われました。宝間比丘は「私は盗みなどした事は無いのだが、、、」と修行をしながら考えました。数カ月経って、ある時、ふと「私は大きな盗みをしていたのだ。」と気付きました。それは自分を盗んでいると言う事なのです。自分の体や財産は大日如来様からの借り物なのに私達は自分の物だと思っているから皆が罪人なのです。従ってそれを懺悔する為にだけでも、毎日礼拝しなければなりません。

ガルチェン・リンポチェ法話集1　修行の道　『五重の道のマハームドラー』p138

前行講座　ドルズィン・トンドゥプ・リンポチェ

まず仏と法とサンガに帰依しますが、これらは外の三宝です。さらに上師と本尊と空行母（ダーキニ）に帰依しますが、これらは内の三宝です。また法身と報身と応身に帰依しますが、これらは秘密の三宝です。このように私たちは菩提に至るまで九宝に帰依します。

それはなぜかというと、［因果関係からして、］発趣するには誓願が先行することが必要であると『菩薩地』［の「発心品」］（訳註 1）に説明されているし、誓願［心］の前に帰依が先行することが必要であると『菩提道灯論』（訳註 2）に説明されているし、また発趣の依処として別解脱戒が必要であると『菩提道灯論』（訳註 3）に説明されているし、別解脱戒を受けるにもまた帰依が必要であると『アビダルマ倶舎論』（訳註 4）に説明されているし、大乗の種姓が無くては最上の正覚への発心も生じないと『菩薩地』［の「種姓品」］(訳註 5)に説明されているのです。
よって、それらすべてが関係し（V97)集積することが必要です。

These form the foundation from which to cultivate action bodhicitta. A person with the qualities up to taking refuge is the basis for cultivating vating aspiration bodhicitta.

This is because, as is mentioned in the Bodhisattva Bhumis, aspiration tion bodhicitta is required in order to cultivate action bodhicitta. The Lamp for the Path to Enlightenment says that refuge must be taken in order to cultivate aspiration bodhicitta. The Lamp for the Path to Enlightenment lightenment also says that in order to cultivate action bodhicitta, one of the pratimoksa vows is required. The Treasury of Abhidharma says that taking refuge is necessary in order to receive a pratimoksa vow. The Bodhisattva Bhumis mentions that without the Mahayana family one cannot receive the bodhisattva's vow even if one cultivates the mind through ceremony. Therefore, all the necessary elements must be connected nected and gathered.

『菩薩地』(訳註 1)
「菩薩はその［菩提］心を生じてから次第に無上正等覚に現等覚することになるが、［菩提心を］生じていないなら、そうではない。よって。発心それは無上正等覚の根本です。」

『菩提道灯論』(訳註 2)
「そのように殊勝なる帰依を説いてから、いまや正覚への発心をとくために」といって、v.10の説明に入るが、『自註訳』に「［有情に対して］母と思うことにより恩に報いる心が生起するのが、慈です。慈の心から悲の心が生起し、菩提心が生起するから、私はここに「慈の心が先行することにより」と語ったのです。」
（中略）
ツォンカパの『道次第論』では、アティシャから伝えられた七つの因果として詳説されている――すなわち、菩提心は増上意楽から、それは悲から、それは慈から、それは恩に報いることから、それは恩を念ずることから、それは有情を母と見ることからである。

誓願《衆生救済の誓いを立てること》[心]の前に帰依《仏・法・僧の三宝を敬うこと》が先行することが必要

発趣《修行を始める》の依処として別解脱戒《律儀戒》が必要

『アビダルマ倶舎論』(訳註 4)
「ゆえに帰依は律儀を正しく受け取ることにとって門となったのです。」

別解脱戒《律儀戒》を受けるにもまた帰依《仏・法・僧の三宝を敬うこと》が必要

『菩薩地』(訳註 5)
「種姓に住することが無く種姓の無い者は、発心もして、努力に正しく住することがあるにしても、無上正等覚を円満する福分が無い。」

大乗の種姓《悟りを開く種となる本性》が無くては最上の正覚《正しい仏の悟り》への発心も生じない

三十七の菩薩行 最初の部分より

ナモ　ローケシュヴァラーヤ

諸法は不去で不来と知りながら
衆生済度に精進したまえる
この上なき師と救主観世音
身語意すべてでうやまい礼拝す

利楽のみなもと円満諸仏らは
正法修して成道したまえり
そは実践を知るによればなり
仏の子らの行を説きあかさん

依処の人は大乗の種姓を具えているべきこと
そのうち、第一[の義]を説明するなら、一般的に大乗の種姓が有ること、特に種姓が目覚めたことが必要です。広汎には上に(第 1 章(訳註 6) に] 説いたとおりに知るべきです。

A. Mahayana Family. Generally, one should have the Mahayana family, but particularly one should be in the awakened family. These details should be understood as explained in the first chapter.

種姓（しゅしょう「しゅじょう」とも）仏教語大辞典
《梵 gotra の訳》　仏または声聞・縁覚・菩薩の三乗それぞれの悟りを開く種となる本性、または素質。転じて、一般に、生まれつき。

英語では『Family』
大乗の種姓で『Mahayana Family』

依処の人は三宝に帰依すべきこと

第二の義、［三宝への］帰依を説明するなら、
　この帰依処もまた、世間の武勇を持った者、梵天(プラフマー)と、遍入（ヴィシュヌ）と、大天(マハーデーヴァ)など、または各自の国の山や岩や海や樹木などに住する力の大きな天・龍たちに帰依すべきか、というなら、
　そのすべてもまた[当面はともかく、究極的な]帰依［処］に適わないので、［究極的な］帰依処ではないのです。 すなわち、『経』（訳註 7）に、「［恐怖する］世間の者たちは山と(H44b) 森と供養処の園林と石と樹木、天に帰依します。その帰依［処]はおもなものではない［し、最上のものではない]。」と説かれています。
　では、父母と友だちなど［、すなわち］自己を憐れむし、益するのを喜ぶ者たちに帰依するのか、というなら、
　それもまた帰依［処]として適いません。『文殊師利遊戯経』（訳註 8)に「父母はあなたの帰依［処]ではない。親友、親族たちもそうではない。彼らはあなたを棄てて、(V98) 欲するとおりに去る。」と説かれています。
　彼らすべてが帰依［処］として適わないのはなぜかというと、帰依［処]に適うのは、彼自身が怖れから解脱して、苦の無いものが必要です。彼らすべてもまた怖れから解脱していないし、苦をもっているからです。

B. Taking Refuge in the Three Jewels. To explain the second topic, the object in which to take refuge, you may ask whether to take refuge in the powerful deities Brahma, Vishnu, Mahadeva, and so forth, or in the powerful deities and nagas of one's country who abide in mountains, tains, boulders, lakes or trees, and so forth. They are not objects of refuge because they cannot give you refuge. In sutra it says:

Worldly beings take refuge In the deities of mountains, Forests, shrines, Rocks, and trees. These are not the supreme refuge.Should you take refuge in your parents, relatives, friends, and so forth-those who are kind to you and who benefit you? These also will not give you refuge. The Representation of the Manifestation of Manjushri jushri Sutra says:

Parents are not your refuge. Relatives and friends are also not your refuge. They will go to their own destination And leave you.

Why can't they give refuge? In order to give refuge, one should be free from all fear and have no suffering. These beings are not free from all fears and are in a state of suffering. Therefore, Buddhas are the only ones who are completely free from suffering, Dharma is the only path for the practice of Buddhahood, and the Sangha is the only guide to Dharma practice. Therefore, we take refuge in these three. Thus, in sutra it says:

梵天（ぼんてん「ぼんでん」とも）仏教語大辞典
《梵 Brahman の訳》インドの古代宗教で、世界の創造主とされた神。古代インド思想で宇宙の根源とされるブラフーマンを神格化したもの。仏教にはいって色界の初禅天に住する仏教護持の神となった。十二天、八方天の一つ。帝釈天と対をなすことが多い。

遍入（ヴィシュヌ）Wikipedia
ヒンドゥー経の神。ブラフマー、シヴァとともにトリムルティの 1 柱を成す重要な神格であり、特にヴィッシュヌ派では最高神として信仰を集める。

大天（だいてん）仏教語大辞典
①四天王のこと。②釈尊滅後百年、教団が上座（保守派）・大衆（革新派）の二部に分裂する原因を作った、いわゆる大天の五事を主張した人物。阿育王の建てた雞園寺に住した。

　よって、苦から永久に解脱したものは仏陀しか無いし、仏陀を成就する道は法しかないし、法を行う友は僧伽しかない［のです。です］から、その三つに帰依すべきです。そのようにまた［『同経』に］、（訳註 9）「怖れた者に怖れを除去なさり、帰依［処］なき者を救護する仏陀と、法と、最上の衆［である］僧伽に対して、今日から帰依すべきです。」と説かれています。
　では、それには救護する能力はあるが、私が帰依したことにより救護なさることは決まっているのかといって疑いを抱かないのです。『大涅槃経』に（訳註 10）に、「三宝に帰依した者は、無畏を得ることになる。」 と説かれています。

From today, take refuge in the Buddha, Dharma, and Sangha, Who protect those without protection And dispel the fear of those who are afraid.（恐れて、怖がって）

Even though they may have the power to give refuge, if I go to them for refuge, will they really protect me? There is no reason to doubt this. The Sutra of the Great Parinirvana says:

By taking refuge in the Three Jewels, One will achieve the state of fearlessness.（大胆不敵？）

（訳註 10）
『大般経』には
「諸仏に帰依を申し上げる者彼は正しい優婆塞です。けっして他の諸天に帰依を申し上げないでしょう。正法に帰依[処]を申し上げるなら、悩害し殺害する心を離れている。僧伽に帰依を申し上げるなら、外道者に組みしないでしょう。三宝に帰依を申し上げるなら、無畏を得るでしょう。」
という。本論への引用と同じく、『教次第大論』に、
「その『[涅槃] 経』には、帰依[処]もまたまさしく仏陀だと成立させることは、これこそが法と僧伽の究竟であるから、帰依[処]もまた唯一仏陀のみだと説かれている。」といって引用されている。

無畏（むい）仏教語大辞典
①畏れないこと。障害や苦しみを畏れないこと。②《梵 Vaisaradya の訳》仏・菩薩の、説法に当たって畏れる所のない自信。

ネット漢字辞典より
「**恐れる**」は、「こわがる」「心配する」という意味で使われます。「失敗を恐れる」「摘発を恐れる」という使い方をします。

「**怖れる**」は、「おじける」「びくびくする」という意味で使われます。「おばけを怖れる」「物音に怖れる」という使い方をします。

「**畏れる**」は、「おそれうやまう」「おそれはばかる」という意味で使われます。「神をも畏れぬ行為」という使い方をします。

※自分が中学生の時（わー、大昔だ）、当時の自分のクラスに来た教育実習生に受けた授業が上記の『おそれる』の言葉を扱ったものでした。実習生としてはかなりチャレンジングな授業だったんだな、と今にして思います。しかし、半世紀経った今でも『畏れる』という言葉は当時の記憶とリンクするから、きっと私にとって良い授業が受けられたんでしょうね。有り難いことです。

三十七の菩薩行

自分も輪廻の牢につながれた
世間の神が誰を救うのか
それゆえ帰依してあざむくことない
三宝帰依が仏子菩薩行　(7)

ガルチェン・リンポチェ法話集1　修行の道　『ミラレーパの道歌』p65～66

主尊三宝に祈りつつ

信仰と浄見を持つことはとても大切です。それはまた三宝の得を理解することを意味します。私たちは三宝に祈願し、仏や法を宝と呼びますが、 三宝とは何でしょうか。仏教徒は仏とは何か、仏の徳とは何か、本当に理解しておく必要があります。仏とは何かと考えるなら、まず仏の徳を理解しなければなりません。

なぜ仏が大切かというと、仏がなければ法もないからです。 法がなければ解脱もありません。なぜなら私たちは「我」に執着し、それ故に煩悩を抱き、六煩悩の故に六道輪廻をさまよい続けているからです。 三悪趣の苦を考えてみましょう。「心を転ずる四つの加行（けぎょう）」では、人や畜生など一切衆生の苦について思惟します。「心を転ずる四つの加行」を思惟することは、まだ生じていない善提心を育む方便です。これを通じて三悪趣の苦しみと貴重な人身について理解します。

この知識がどこからきたのかというと、三宝です。三宝が道を示してくださいました。帰依戒を受けますと、まず釈尊がおられたこと、次に釈尊が法を説かれたことを学びます。法とは何かというと、カルマと因果を理解することです。私たちは幸せを求めますが、幸せの因が分からないので、もっと働いてもっとがんばろうと考えます。ですがそれは幸せの因ではありません。どんなにがんばって働いても幸せにならないこともあります。 幸せになる人も、ならない人もいます。それはカルマによるのです。けれども人々はそのことを知りません。 幸せの因が慈悲であることも知りません。ここに、三宝が私たちに示してくださった道があります。釈尊は、法という道を示してくださいました。

釈尊が法を説き、法からサンガ（僧伽（そうぎや））が生じました。八万四千の法門があり、仏像があり、大蔵経があります。ですがこれらすべてがあったとしても、もしサンガがなければ、説いてくれる人がいないのですから、本だけあっても何の役にも立ちません。 実際に仏の教えをすべて理解するためには、その教えを理解して説く人が必要です。ですから私は、サンガこそ最も大切だと思います。サンガは仏と法よりも大切ではないかと思うのです。サンガが教えを訳して説いてくれるのですから、 サンガにこそ三宝が現れています。サンガの身体はサンガ、サンガの言葉は法、サンガの心は仏です。 サンガの心は仏と言うときの心は、私たちみんなの心です。 ひとつの心相続なのです。

三宝への帰依

よって、その三［宝］に帰依することを説明するには、
摂義（サンガハ）は、「区別、依処と対境と時、思惟、儀軌、(H45a)作業、学処と利徳――［これら］九つの義により、帰依は包摂されている。」というのです。

Therefore, this will explain how to take refuge in these three.

The summary:

Classification, working basis, objects, time, Motivation, ceremony, activities, Training and beneficial effects-These These nine comprise the explanation of taking refuge.

九つの義

区別（Classification：分類）

依処（working basis：作業基盤？）　よりどころ？

対境（objects：対象？）

時（time）

思惟（Motivation：モチベーション）

儀軌（ceremony：儀式）

作業（activities：活動）

学処（Training：トレーニング）

利徳（beneficial effects：有益な効果）

帰依の区別

そのうち、第一、 帰依の区別は二つ。［すなわち、］
1）共通の帰依と、
2）特別の帰依です。 （V99）

1. Classification. There are two categories of refuge: the common' refuge and the special refuge.

※『区別』の説明はこれだけなんだ。

帰依の依処の人

依処の 人 についてもまた二つ［。そ］のうち、
1）共通の（帰依の］依処の 人 は、 輪廻の苦を怖れるし、三宝を神と執らえる者たちです。
2）特別な［帰依の］依処の 人 は、 大乗の種姓をもった天・人の身体の清浄を得た者たちです。

2. Working Basis. There are also two different working bases. The common working basis is one who fears the suffering of samsara and holds the Three Jewels as deities. The special working basis is a person son who possesses the Mahayana family and the pure body of gods or humans.

1）『共通の依処の人』とは我々のこと？
2）『特別の依処の人』とは、これから悟りを得ようとする素質を持った人のこと？

2020/5/7　中村

ガルチェン・リンポチェ法話集1　修行の道　『ミラレーパの道歌』p94

清浄祈願によりて導かれ

　あらゆる成就は誓願の力によっています。たとえば、帰依戒を授かると、願うことすべてが成就すると言われています。というのも、帰依戒を授かることは、その人が仏国土の一員に、サンガの一員になるということだからです。たった四人でも集まればひとつのサンガです。サンガの誓願力はとても強いのです。ある国の市民になれば、その国の認める権利、市民としての力をすべて持つことになりますね。これと同じように、サンガの一員になると、あなたにも祈願を成就する力が備わります。これが帰依戒を授かるか授からないかの違いです。祈願が成就するかどうか、です。帰依戒を受けずに祈った場合でも、いくらかの力はありますが、果はそれほど大きくありません。しかし帰依戒を受けておれば、どんなに小さな祈りでも、どんなに小さな善行でも、とても大きくなります。なぜならあなたの祈りはすべての仏の祈りとひとつに溶け合うからです。こういった理由で、帰依戒を授かった人の祈願はとても強力なのです。『月燈三昧経』にも、断食行の一日戒の益が説かれており、台湾にはこの翻訳があります。

※『帰依戒を授かると、願うことすべてが成就すると言われています』…、近頃本当にこれを感じています。神社仏閣にお参りしたとき（神社は仏様の出張窓口のように思っている）などにも、以前野田先生から教えて頂いた文言、『願わくは御身らの尊きわざに　わが身心を使われんことを　世のため人のために尽くさしめ給え』とお祈りしてますが、ホントよく聞いて下さる。「エッ？これも私の仕事ですか。ヒェ～やっぱそうきますかぁ～」と、次々（たぶん私に出来る）仕事を回して下さいます。『いや、そこまで回してもらわなくてもエエんですが…』と思ったりもしてるんですが。
いやいや、有難うございます。『すべての仏の祈りとひとつに溶け合っている』んですね。感謝でっす！

五重の道のマハームドラーの前行

p 46

第三　資糧を積むためのマンダラ供養 より

無量三千大千世界中　わが持つものも持たざるものもみな
わが身と財宝持つものなんであれ　惜しまず宝の海に捧げなん
衆生の我執が鎮まり菩提心　生じて共に仏果を得ることを

この偈は繰り返し唱えて集積すべきである。